

◆特集◆

シンポジウムを終えて

—「観光まちづくり」「生活型観光」が

生み出す地域の持続可能性—

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 林 浩一郎

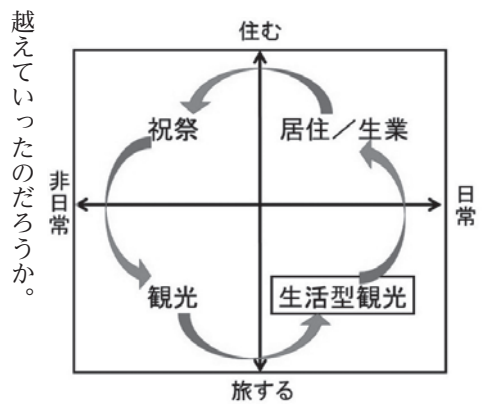
シンポジウムの来場者数は一〇〇名を超えた。アンケート結果を見ると、名古屋市内在住の方々にとどまらず、市外、愛知県外の方々も多く参加されていた。また、幅広い世代に参加して頂いた。筆者も含め聴衆は、田口氏・森氏・高野氏の取組みに魅了された。

ここでは、これらの取組みを「観光まちづくり」「生活型観光」という観点から捉えなおしてみたい。「観光まちづくり」とは、①「地域社会」が主体となって、②「地域環境」を資源として活かすことで、③「地域経済」の活性化を促すための活動である（西村幸夫編『二〇〇九「観光まちづくり」学芸出版社）。高野氏が言うように、「自然が持っている価値を、経済的価値に変える」農村の人びとの取組みは、まさにそれである。

従来の「観光」は、地域の歴史的・文化的資源を食いつぶす、「持続可能ではない」行為と見られがちだっ

た。だが、「地域社会」が主体となり、「地域資源」や「定住環境」を維持しながらも、「来訪者の満足度」を維持し、地域全体の「持続的な発展」を推進する（観光まちづくり研究会『二〇〇〇「観光まちづくりガイドブック」』。田口氏・森氏・高野氏の取組みは、農山村における「観光まちづくり」としても理解できる。

さらに、旧来の「観光」は、「人が日常生活圏を離れ、再び戻る予定で、レクリエーションを求めて移動すること」だった（国際観光年記念行事協力会『一九六七「観光と観光事業」』。それは、「非日常」的世界を「旅する」という営みだ。しかし、加子母にしろ、上石津にしろ、その活動は従来の「観光」では捉えきれない。たしかに、来訪者は「観光」目的で、農山村に来たのかもしれない。だが、彼ら／彼女らは、そこに移住し、生業を営み、居住するに至っている。彼ら／彼女らは、この「観光」と「居住」の間を、どのように



越えていったのだろうか。

そこには、「居住/生業」と「観光」の乖離を埋めるもの、すなわち「日常」を「旅する」という段階が存在するのではないか(右図)。ここでは、そのような位相を「生活型観光」と呼びたい。加子母で合宿していた大学生も、初めは「観光」気分だったろう。しかし、土地の人びとと語り、食事し、働き、洗濯し、眠るうちに、それは次第に「日常的な生活」になっていく。そのうち、彼らはそこで仕事を覚え、居住しはじめる。その「観光」と「居住」の間に介在する「生活型観光」を、田口氏、森氏、高野氏はプロデュースしている。この「日常を旅する」生活型観光を掘り下げることが、「地域の持続可能性」を考える際には、重要であると筆者は考える。